ま　え　が　き

先のことは神の領域に属し，人間どもには仲々見えてこない。変転極まりない現在を生きる旅人には，刻々に変化する現在を知ることによってしか未来をかいま見ることがゆるされていない。したがって，未来への，つつがない旅を願う限り，現在に関するモニタリングを続けることは最後まで残される大きな課題の一つであり，責任でもある。

この研究プロジェクトのもう一つのねらいであった総合化は，目的設定によって，決定されるべき内容も自ら違ってくるが，いずれの場合も，その根幹に“命”が据えられてしかるべきであり，これが視野から欠落するとき，科学や技術は堕落する。命はこまぎれではない。この意味であろうか，環境の崩壊は心の崩壊の道づれであると表現した哲学者もいた。やはり総合化は未節ではなく核心ではある。

そんなわけで，試行錯誤をくり返しながら，４年間にわたる継続研究の最終年を，ここにおわろうとしている訳であるが，よりよい未来を志向し，“麗しい信州の自然と心 ” を次の世代へ手渡そうと願う以上，懇談会の営みにも終りはない。さいわい，今まで空席となっていた懇談会の座長に釘本完教授が就任された。今までの反省をふまえ，新しい舟出を準備するには極めてふさわしい時をむかえている。その意味では，ここに集録された諸論文も未完の礎である。さて

第Ⅰ編では，それぞれの方法論にもとずく研究成果や，環境概念の再整理，各自の環境観などが収録されている。

第Ⅱ編では，環境科学を志向する人達にとって極めて示唆に富む特別寄稿“新しい水質基準について”：合田健先生（国立公害研究所水質土壌環境部部長）が掲載されている。これは1981年１月23日，本学旭会館において，当懇談会主催で開かれた講演会の内容を中心にまとめられたものである。なお同日の沖野外輝夫先生（懇談会メンバー）の講演については次の機会に掲載させて頂く予定である。両先生にこの紙面をおかりして，厚く御礼申し上げます。

以上のように，幾多の成果がおさめられているものの，残されている宿題の方がはるかに多い。従前にもまして各位の御教示を頂ければ幸である。

一つの区切りを終るに当り，懇談会の諸氏はもとより，各方面で，この研究を支えて下さった皆様方に心からお礼を申し上げます。

信州大学環境問題研究教育懇談会
研究代表者　松　田　松　二